

〈研究ノート〉

「当惑」の社会的意義 ——ゴフマン理論からの展開——

西川 知 亨

はじめに

しつけのつもり、でも虐待？ 30代ママが悩む子どものしつけ——子どもの行儀が悪いと、しつけていないと親が責められる。でも、『おしりペンペン』では虐待を疑われる。母親たちが困惑している¹

このような導入から入ったが、本稿は、母親と子どもの関係の問題を扱おうとしているわけではない。そうではなくて本稿は、人々が感じる「当惑（困惑）」について扱う。人は社会生活を送っていくなかで「当惑」することがある。例えば、赤面したり、どもったり、声が高くなったり低くなったり震えたり、汗をかいたり、蒼ざめたり、手が震えたり、言い間違いをしたなどという形で当惑する。さらに主観的には、筋肉が緊張したり、口が乾いたり、目まいのような感覚を覚えたりといった経験もする[IR: 97, 訳 94]。程度の差はかなりあるが、典型的にはこのような経験が「当惑」である。

これまで、ゴフマンが扱った個別感情——「当惑」についての言及はしばしばなされてきた²。しかし、その内実についての研究は決して多いとは言えない³。数少ないゴフマンの「当惑」研究を見ると、特に強調されて来たのは、「当惑回避型」の人間像である。人々は当惑するのを嫌がる。できれ

¹ Asahi Shimbun AERA 2001.11.19, 28 頁。子どもをいたわるべきだとするルールと、子どもをきびしくしつけるべきだとするルールが矛盾している例である。

² 社会学が感情に特に注目するようになったのは 20 世紀も後半に差しかかったところである。古典的には、感情とは非合理的なもので近代の合理的な秩序とは相反するものとしてとらえられることが多かった。もちろん、感情が秩序の阻害要因となり得ると考えられるような状況も多い。しかし、そのような状況ばかりではない。感情が秩序にとって重要な機能を担わされていることも多い。そして社会学で扱う個別感情は、もっぱら何らかの意味の差異から生まれてくることになっている。ゴフマンが扱った「当惑」も、そのような意味の差異から生まれてくる個別感情のひとつである。個別感情論の課題、さらには感情社会学の展開については、岡原[1997]等を参照。

³ ゴフマンの「当惑」に関する指摘は例えば、Colomy and Brown [1995: 36]、石川[1992: 234-5]、中河[1995: 198]、小原[1997: 14]、船津[1999: 276]、Chriss[1999: 65]など。この他、Abbott[1999: 195]は、ゴフマンの「当惑」を時代遅れの理論として揶揄している（本稿がそれへの挑戦の第一歩となれば幸いなのだが）。ゴフマンの「当惑」についてやや詳しく扱っている先行研究としては、Heath[1988]、草柳[1991]、安川[1997]のほか、大村[1990b]などがある。

ば当惑したくないと願う。そのために他者が当惑しないように、そして自分も当惑しないように注意を払って「共同作業」を行う。何しろ当惑とは秩序が脅威にさらされていることの徴候なのだから。そうして場の秩序が保たれる。このような「当惑回避型」の人間像がもっぱら強調されて来た。さらには、次のような指摘もある。このような当惑回避のハビトゥスは現代社会の権力作用システムのなかに組み込まれている。そして人々は秩序に志向するために、当惑を回避するように身体化されていると。

このような「当惑回避型」の人間像は、現代社会の重要な一側面をついている。当惑は単なる個人的な個別感情の一つではなく、秩序の「ために」起こってくる社会的感情であると社会学的に考察されて来たことの意義は大きい。秩序と相反する非合理的なものとしてとらえられることも多かった「当惑」が、ゴフマン理論を通して秩序に対して持つ意味を見出してことは大きな進展であった。しかし、この「当惑回避型」の人間像に特にとられることで見落としがちなる点もあるように思われる。ここでいくつか次のような問題提起をしてみたい。当惑とはいつでも回避の対象なのだろうか。人々は当惑をどのように処理しているのだろうか。当惑を「示すこと」に積極的な意味はないのだろうか。これらのことはあまり考察されないままである。これらのことを考察するためには、当惑が起こる原因と、当惑の処理の方法と意味、さらに当惑を「示すこと」とルールや構造との関係についてもう少し検討する必要があるように思われる。

本稿はゴフマンの著作をベースにしながら、「当惑」の社会的意義について考察をしたい⁴。ゴフマンの「当惑」に関する論文としては、「当惑と社会組織」がある⁵。だがこの論文に限らず、ゴフマンは様々な文脈で「当惑」について論じている。ここで取り上げるのは、大きく2つの文脈から生じる「当惑」である。1つ目は儀礼ルールから外れた逸脱行為をしてしまったり目の当たりにしたときに生じる当惑である。2つ目は同じ状況では両立不可能と思われるようなルールが同じ場面で直面して生じる当惑である。これら二つの文脈からの当惑は共通して、あるルールから外れたときに生じる当惑として位置づけることが出来る。

1 儀礼ルールと逸脱行為

1-1 儀礼ルールからの逸脱

⁴ 本稿では、ゴフマン文献に関しては参考文献に示した略記を主に用いる。

⁵ 「当惑と社会組織」論文は『相互作用儀礼』（1967）に入っているが、もともと1956年のAJSに発表された論文である。なお、この他に特に当惑に関連した問題を扱っている論文として、「フェイスワークについて」、「相互作用からの疎外」（共に『相互作用儀礼』所収）と「印象操作の技法」（『日常生活における自己呈示』所収）を挙げておく。

当惑とは、何らかのルールから外れることによって生じる。ここでは、儀礼ルールから逸脱した行為をしてしまったり目の当たりにしたときに生じる当惑について考察することにしたい⁶。

ゴフマンは、現代世俗社会の日常でも儀礼活動が行われていることを発見した⁷。これは現代社会のマイクロ分析にとって大きな貢献だった。ゴフマンは、儀礼を次のように位置づけている。

儀礼とは、個人が何らかの究極的価値の対象に対する自分の敬意 (respect) と心遣い (regard) を表現するために、その究極的価値の対象やその代わりになるもの (stand-in) に対してなすような表面的で慣習化された行為である。[RP: 62]

そして儀礼的な行動とは「儀礼ルール」によって規制されている。その儀礼ルール (行為のルール) や、それをめぐって起こる感情については次のように言っている。

⁶ 儀礼ルールと一口に言っても、状況内は様々な儀礼ルールによって支配されている。だから、一つの状況内にある儀礼ルールの中で矛盾が生じることも多い (この矛盾も当惑を生む原因であり、集まりのマイクロ原則の矛盾を表わしているのだが)。例えば、ゴフマンは次のような例を挙げている。

一方では参加者は会話の話題に自然に熱中してしまうことを要求される。しかも他方では、彼らは自己をコントロールして、話者の役割の範囲内にとどまり、他人を不愉快に陥れるような微妙な問題に敏感であるように、つねにつとめているように要求されるであろう。[IR: 134, 訳 133]

ゴフマンは続けて次のように言う。

一方で彼らは、適用されるすべての行動のルールを遵守する義務を負うであろう。その一方で、関与者に対する最低限レベルの刺激は保証するだけの自由を持つことを義務づけられる。[IR: 134, 訳 133-4]

そしてゴフマンは、「これらの義務は相互に矛盾しており、非常に微妙で、繊細な行動のバランスを必要とするので、相互作用のなかにある人に疎外と不安を生むのが普通であるように見える」[IR: 134, 訳 133-4]と指摘する。つまり、出合いでは、まず、会話に熱中することで「状況に対して敬意を払う」[BP: 25, 訳 28]ことを要請する儀礼ルールと、自己をコントロールしながら他者に配慮する儀礼ルールが矛盾しやすい。さらには、行動のルールを遵守すべきという儀礼ルールと、最低限レベルの自由を保障するという (個人の自由裁量の範囲を許す) 儀礼ルールが矛盾しやすいのである。本稿 2 章で見ていくように、このように矛盾する諸義務 (ルール) は、当惑を生みだす要因ともなっていくのである。

⁷ ゴフマンの儀礼論の研究に関しては我が国でもかなりの量が蓄積されているのでそちらを参照のこと。例えば、高橋[1982]、桐田[1982, 1989]、安達[1984]、宮坂[1984]、石黒[1985]、大村[1985, 1990a]、紀[1988, 1990]、安川[1988]、藤澤[1988]、椎野[1991]、宮内[1991, 1995]など。ゴフマンの儀礼論に関してよく指摘されるのは、デュルケムやラドクリフ・ブラウンの機能主義の影響である。現代世俗社会での儀礼活動の考えに関しては、ゴフマンのシカゴ時代の師の一人である W・L・ウォーナーの影響も指摘できる[Collins 1994; Winkin 1988, 1999]。なお、ゴフマンは『公共における諸関係』(RP)以降は、儀礼概念に動物行動学的な意味合いも持たせている。

行為のルールは、快適で安価で効果的であるというのではなく、適正あるいは正しいゆえに推奨される行為のガイドと定義されるであろう。それに対する違反は、不安の感情と否定的な社会的サンクションを生み出すというのが特徴である。行為のルールは、活動すべての領域に浸透しており、ほとんどすべての物の名と名誉によって支持されている。[IR: 48-9, 訳 43]

われわれは様々な儀礼ルールのもとで社会生活を送っている。儀礼行動とは、自他の体面を究極的価値の一つとして保持しあうように振る舞うものである。自他のフェイス（体面）を保持するためには、適切な振る舞いでもって、相手に敬意を伝えるような行為をしなくてはならない。そのような要請はルールとして相互作用秩序のなかに組み込まれている。しかし、そのようなルールはいつも守られるわけではない。様々な形で儀礼ルールは破られる。そしてそうして感じられる感情の一つが「当惑」である。儀礼ルールから逸脱した行為によって生じる当惑の例をいくつか見ていこう。

まず、満員電車の中の例。人々は普通、生態学的な距離を保ちながら空間の中で適正な位置を占め、自他の「テリトリー」[RP: 28-61]を守ろうとする。しかし、満員電車のなかでは見知らぬ人同士がお互いに近接することを強いられる。そのため、自分のテリトリーを狭くするか、または普段なら他者の侵入を拒むような自分のテリトリーを他人と共有せざるをえなくなる。そうしてなんとか自分の最低限のテリトリーを保持しようとする。しかし、それでも人の足を踏みつけてしまうことがある。儀礼ルールが明らかに破られる瞬間である。儀礼ルールから逸脱して足を踏みつけるという行為が（多くの場合、特に足を踏みつけた人に）当惑を生み出す（この場合、次節で見るように「攻撃者」は直ちに感情を整えて、しかもいくらかの当惑を示した上で陳謝などの修復作業が行うのが通常である）。

また、公共空間とは、知らない多くの人が行き交う場所である。だが、たまには顔見知りの人と出会うことがある。顔見知りの人と出会えば、挨拶をするという儀礼ルール（支持的儀礼（やりとり）[RP: 62-94]）がある。そこで顔見知りの人に挨拶をする。しかし、顔見知りのはずの相手が自分を無視して通り過ぎてしまうことがある。そのような時、あいさつをした人は当惑する。顔見知りの人と出会えば挨拶をするという支持的儀礼のルールが、無視という行為によって破られた瞬間である。支持的儀礼のルールから逸脱した無視という行為から生じた当惑である。

また、都市のストリートで男同士が腕を組んで歩いていたり、極端に年齢差のある「カップル」が手をつないで歩いていけば、解釈によっては当惑の原因となる。腕を組んで歩いたり、手をつなぐという行為は往々にして「カップル」を表わす（儀礼イディオムの一つとして[RP: 225-37]）。そのような儀礼ルール（イディオム）と、不釣り合いな二者の行為は、相いれないものとされ、周りの当惑の原因となりうる。

さらに、公衆の面前でよつんばいになって前進している男がいたとしよう。この場合も多くの場合、まわりの人は当惑するだろう。何しろ、人は適切な関与をもって状況適合的に振る舞うことが要請さ

れている。適切な振る舞いとは、自分と状況に対してある種の「敬意」を払うことである。そのように要請している儀礼ルールから逸脱したよつんばい行為は、当惑の原因となるのである。

これらは儀礼ルールとその逸脱行為のほんの些細な例である。それではこのようにして生じた当惑を人々はどのようにして処理しているのだろうか。

1-2 当惑の処理——修復と儀礼ルールの確認

それでは儀礼ルールから逸脱することによって起きてきた（または起きることが予想される）当惑に対して、人々はどのような処理を行っているのだろうか。当惑を処理するということは、つまり逸脱行為を少しでも逸脱でないような意味に変換するような作業を行うことである⁸。当惑は、問題となる可能性がある行為を行った人によっても、その当該行為を目撃した人によっても起こりうる。それゆえ、当惑を処理する作業は、状況内のあらゆる人によって行われる可能性がある。

まず、行為の意味を変換して儀礼ルールに沿うように近づける方法がある[RP: 108-18]。つまり、逸脱行為と思われたもの（または思われるかもしれないもの）の意味を変容させて、逸脱行為でないと思われる意味に変えることである。先ほどの、挨拶を無視された人の例で言えば、「考え事をしていて気づかなかった」と考えれば（説明がなされれば）、逸脱行為としての「最悪の解釈」は免れることができそうである。年齢差のあるカップルは、「親子であって、体の不自由な親を子が支えている」と考えれば（説明がなされれば）、疑念はなくなるかもしれない。よつんばいになって前進している男に関しては、「コンタクトを落としてしまって探している」と考えれば（説明がなされれば）、少しは納得が行くかもしれない。

または、これは容易ではないことが多いが、儀礼ルールの方の意味を変換させて、当該行為を逸脱でなくする方法がある。男同士が手をつないで歩いているカップルに関して、「性愛志向は個人の自由である」と考えれば、当該行為は逸脱行為ではなくなることになる（ただし原則間にあらたな矛盾が生じて、別の当惑を生む原因ともなり得るのだが）。

これらは、「弁明（accounts）」としてとらえられうる。焦点の定まった「出会い」の場面にせよ、焦点の定まらない相互作用の場にせよ、もっともらしい弁明を聞いたり、また導入することで当惑は処理される。例えば、私はやっていないと主張する。確かに行為は行われたが、自分に落ち度はないと主張する。単にジョークでやったのだと説明する。能力がなかったのだと説明する。こうなるとは思わなかったとする。法的審判の手続きに似て、さまざまな弁明が考えられる。しかし、逸脱行為から生じた当惑の処理として成功させるためには、その弁明がもっともらしいものである必要がある。

また、自分（や自分の保護すべき人——子どもなど）が逸脱行為を行ったときは「陳謝（apologies）」

⁸ 当惑を処理する修復の方法も、儀礼ルールのなかに用意されている。これも儀礼ルールの柔軟性を示している。

という処理を行うことも出来る。陳謝とは、自己を二つに分けて行う行為であると言える。ゴフマンは自己を儀礼的役割にそって「現行の出来事すべての表出的意味が綴り合されてできあがるイメージとしての自己」と「儀礼ゲームにおいて、誇り高くまたは不名誉に、外交的にまたはぶしつけに、あいつぐ偶発事に対応する一種のプレイヤーとしての自己」に分けている[IR: 31, 訳 26-8]。そして儀礼ルールからの逸脱行為は「プレイヤーの自己」の責任にすることで、「イメージの自己」を守るのである。もしくは「攻撃の罪がある部分」と「それ自身不法行為と分け、攻撃したルールにおける信念を確かめる部分」に分けた上での修復作業が行われると言ってもよい[RP: 113]。ともあれ逸脱行為は否定的なものとしてとらえられ、儀礼原理も守られる。満員電車で人の足を踏みつけてしまえば、多くの人は当惑するが、すぐに自分の感情を整えて（しかも若干の当惑を表明しながら）「すみません」などと陳謝する作業とは、自己を二つに分けて行われる作業である⁹。

このような修復がうまくなされない場合、問題の行為を行った人を「逸脱者」と認定して当惑を処理することもある。例えば、街でよつんばいになって前進している男を「あの人はヘンだ」、「ヘンジンだから仕方ない」などとして処理する方法である。そうして状況適合性がかかわった儀礼ルールの再確認、強化が行われると言える。

儀礼ルールからの逸脱行為は当惑を生む。だが、当惑を処理する方法もまた、修復作業等を可能にする儀礼ルールのなかに用意されているのである¹⁰。

1-3 状況内で当惑を表出すること

たしかに当惑とは一般的に嫌がられる対象である。人はできれば当惑したくないと願う。もし当惑を起こしてしまったら（もしくは予想されれば）多くの場合、ただちに処理がなされる。しかし、状況に無関連のものとして往々にして排除される傾向にある当惑は、時に状況に入り込むことが容認さ

⁹ さらに、儀礼ルールと逸脱した行為を行うことが予想されるときには、当惑を生じさせる前に予防線を張っておくことができる。テリトリー保持の儀礼ルールと矛盾するかもしれない行為をする前や開始時に、逸脱の可能性がある行為を修復して行う行為がある。ゴフマンが「懇願 (requests)」と呼ぶ行為がそれである。懇願は、テリトリー侵犯になるかもしれない行為の前か遅くとも行為を始めたときになされる。例えば、「個人的なことを聞いてもよろしいですか」、「……を貸していただけませんか」などと聞く行為がそれに当たる。すべての自己テリトリーには、侵入する許しを請う手段がある。つまり、自己にはテリトリーを守りながらも、日々の相互作用に参加しようする方法があるのである。ここには、デュルケムの積極的儀礼と消極的儀礼の考えに対応した、ゴフマンの儀礼論にあらわれる二重性の特徴を見て取ることができる。

¹⁰ クリスが指摘するように、当惑は「役割距離」行動を生むことがある[Chriss 1999: 75]。クリスは、役割距離の表明とは、「自分が何でないか」を表明する、つまり役割に付随した想定の自己 (virtual self) を否定する行動であるとしてとらえている（「否定的自己 (negational self)」）。役割距離は、想定の自己を否定し、状況をつつがなく運行させるための修復的作業としても機能する。役割距離論の整理については、近藤[2000]を参照。

れたり、また求められたりもする¹¹。

先ほど述べた「陳謝」の際には、当惑を示すことが多いし、また求められているとも言い得る。「当惑」を表明しない「陳謝」は、どこかふてぶてしさすら感じることが多い。陳謝の際に当惑を示すことは、逸脱行為をしない別の人間でもあり得た自分の可能性をも保持することをも意味する。そうして、相手に敬意を与えることのみならず、適切な振る舞いで持って「イメージとしての自己」を保持する働きもする。当惑とは、あるリアリティを否定することでもある。当惑を示すことは、重度の儀礼侵犯者としてのイメージを否定する作業でもある。

もちろん何らかの儀礼ルールから逸脱することによって当惑は生じる。しかしその逸脱による当惑が人々にとって心地よいと感ぜられたり、さらには状況にとっても機能的であると考えられる場合もある¹²。ゴフマンは次のような例を挙げている。

私は、人が他人から期待されるものとは異なるような関与配分をみずから受け入れる他の場合についても言及したい。若年者が年上の者からからかわれたさいに、または従業員が雇用主から質問を受けたさいに、下位の者が落ち着きを失うことは、上位者によって、期待された、適切な関与パターンの一つとして受け入れられるだろう。そのような場合には、下位者は、自発的に会話に関与したいのだが、興奮しすぎていてそうすることができずと感ずる。いっぽう上位者は、彼にとって適切な、そして心地よく維持することのできる関心の焦点は、実際の会話ではなく、下位者が会話に苦闘しながら陥っていくこっけいであわれな状態によって生み出される、より広範な状況そのものである。事実、もしこのような場合に、下位者が落ち着きを示したならば、上位者は、侵害されたと感じ、当惑するであろう。同様に、彼が置かれている困難な状況からみて、それに没頭するか、懸命に関与すべきだ、と感ずるような場合がある。この関与の不足は、ある程度は相互作用を瓦解させるであろう。しかし彼の完全な落ち着きは、相互作用をさらに瓦解させてしまうほどに、参加者を憤慨させるであろう。それゆえ、人は、もし難しい条件のもとで会話に関与し続けるならば、ときに相互作用の英雄と考えられるであろうが、その他の時には、そのような忠誠は向こう見ずともみなされるであろうことは確かである。[IR: 130-1, 訳 129-30]

さらにゴフマンは次のようにも言っている。

¹¹ 無関連のルールによって排除されたものうち、変形ルールによって状況に見合うものは状況に見合う形で変形されて状況に向かえ入れられる。「役割と出来事が局所的に具現化される世界は、参加者をなんらかの関連性を持つかもしれない多くの外部に基礎を置く事柄から切り離してしまうが、しかし、相互行為の世界に、その公式の部分として、これらの外部的な事柄がわずかながら入り込むことを容認する」[EN: 31, 訳 20]。

¹² これは異元結合による「笑い」の生起とも関連があると考えられる。異元結合による「笑い」については、森下[1996]、谷[1987]などを参照。

自己意識的な人間の混乱状態は事実、それを目撃している者にとって、自発的な関与を呼び起こすよい刺激となるので、参加者の関与を獲得するのが難しいような会話のさいに、人はわざと少しばかり礼儀に欠けることを行って、当惑するという役割を演ずることにより、関与を確保することがある。したがって、そこには、もしすべての正しい社会的行動のルールが厳格に遵守されるならば、相互作用はたんだ、気の抜けた、味気のないものになる、というパラドックスがある。[IR: 130, 訳 297]

一般的には、人びとが当惑することによって場のリアリティは脅かされる。しかし、当惑の表明は、あるリアリティを否定し、別のリアリティを強化するように機能する場合もあるのである。これも社会構造が柔軟性を獲得しているような一側面であると言えるであろう。多元的なルールないし原則が社会を支えているようなところがあるのである。次の章では、ルールとルール（原則と原則）の矛盾から来る当惑について取り扱うことにしたい。

2 矛盾する諸ルール

2-1 諸原則の矛盾

すでに述べたように、「当惑」はあるルールから外れてしまったときに生じる。この節では、矛盾するルール（原則）のうち、どちらに従ったらよいか迷うときに生じる「当惑」について見ていくことにする。社会生活においては、同じ状況では両立不可能と思われるようなルールが、同じ場面で出会うことが往々にしてあるのである。

まずは、『アサイラム』からの例を見てみよう。精神病院とは一般的に、患者への善良な治療サービスが期待される場である。しかし実際の精神病院は施設の存続に重点を置いており、患者の人格をある程度無視しないと（物扱いしないと）、運営上成り立たないところがあるのである。そのため、患者を「人間」として見る道徳心をもったスタッフは当惑を覚える。患者を一人の「人間」として見るルールと、施設を機能的に運営していくためのルールとはしばしば矛盾するのである。

……人間という素材が他の種類の素材とは異なる、したがってまた独自の問題を呈示して来る一般的な仕方は、職員がどれほどこれらの素材から遠ざかろうとしても、これらの素材が仲間であるという感情を、ときには愛情をすら覚える対象になることがある、というものである。被收容者が人間に見えて来る、という危険は常に存在するのだ。苦しみを与えるのではないかと感じられることが被收容者の肉体に加えられなければならないときには、〔彼に〕同情的な職員は苦しむ。（これこそ、結局のところ、士官が召集兵との間に距離を保とうとする一つの根拠である。）

……

精神病院には、まぎれもなく自己の利益に反することを劇的に遂行する患者が少なからずいるように思われる。たとえば、水を自分で汚してから飲むとか、感謝祭とかクリスマスに食べすぎて、そのような日には胃ヘルニアとか食堂閉塞を起こす者がでるとか、壁に頭からぶつかって行くとか、ちょっとした手術をしたあとで縫合したところを破いてしまうとか、それがなくては食べることもできずまた作り直すのに何ヶ月もかかる義歯を水洗便所に流してしまうとか、なくては物を見ることもできないメガネをたたき壊してしまうとか、などといった例である。このような破壊的な行為をやめさせようとするとき、職員はそのような行為をする被收容者を手荒に扱わざるを得ないのだ。人間であれば誰でも他人に対してしてはならないことを被收容者が自分に対してするのをやめさせようと、職員が努力を傾けているまさしくそのとき、職員は酷薄で押しつけがましい人間というイメージを与えることになる。このようなとき、自分自身の感情をおさえることが職員にとってきわめて困難であることは理解できないことではない。[AS: 81-3, 訳 85-7]

それでは続けて、ゴフマンのテキストから、矛盾する諸原則が会うことで生じる当惑について見ていこう。

ゴフマンは、見習工と熟練工が、「コカコーラ販売機の前で」はちあわせたときに起こる当惑の例を挙げている。この例は、主に見習工の間で共有されている「平等原則」と、主に熟練工の間で共有されている「地位原則」の矛盾によって生じる当惑である。

ある工場施設の全面的共同利用に対する見習工の要求の背後には、その機構のすべてのメンバーは、ある意味でメンバーとして平等であるという組織の原則が横たわっている。報酬のうえで適切な評価をして欲しいという熟練工の要求の背後には、単なる仕事ではなく、仕事の種類が地位を決めるという原則が横たわっている。[IR: 111, 訳 109-10]

ゴフマンが描いたスティグマ者は、常人と同じ人間であるが、それでもやはり同じではないという期待の原則の矛盾を伴いながら生活をしている。スティグマ者は、自分自身をどのようにとらえるかについて複数の矛盾する期待の原則を背負わされているために、スティグマ者自身も周囲の人々も当惑しやすい。ゴフマンは、盲目の作家がホテルの理髪室でひきおこした凍り付いた雰囲気（consternation）の例を挙げる。

私が案内されて、制服を着た接客係にほとんど事実上抱き上げられたとき、店はシーンと静まり返って、重々しい雰囲気であった。私は冗談をいってみた。必要の如何に関係なく三月に一度散

髪するとき、きまっていう冗談であった。〔ところがここでは〕失敗であった。沈黙が私に知らせたことは、私は冗談をいってはいけない人間だ、ということであった。それがたとえかなり気のきいた冗談であっても。[ST: 120, 訳 195]

ある人の所属集団や地位が変化するとき、本人や周囲の人が当惑することがある。所属集団や地位が変化する前の「場」や集団におけるルールと、変化の後の「場」や集団のルールが異なるからである。次の例は、人生半ばにしてスティグマを持つようになった人に関する指摘である。

付言されなくてはならないことは、ある人が、人生の半ばで自己が新たにスティグマをもつとき、彼が新しい同類に感ずる気まずさは、徐々に、昔の同類に対して感ずる気まずさにとって代わられるということである。スティグマをもつようになった後の知己は、彼を単に欠点をもつ者と見ようが、スティグマをもつ以前の知己は、彼の昔の状態のイメージに固執して、如才なくしかも礼儀にかなった仕方でも、また、こだわりのない充實的な受け容れの態度でも彼を扱うことはできないだろう。[ST: 35, 訳 62]

ここで場面ごとの役割について少し考えてみよう。個人は、色々な場に参加し多面的な役割を演じている。そしてそれぞれの場には、それぞれのルールがある。それぞれの役割の遂行は、それぞれのルールに基づいてなされる。しかし、それぞれのルールを見てみると、お互い矛盾することも多い。だからそれぞれのルールの間における矛盾が露呈しないように、注意が払われる。それが当惑の原因となるのだから。その技法の一つが、「オーディエンスの分離」である。個人は、「オーディエンスの分離」によって役割のジレンマからすくわれている[IR: 108, 訳 106-7]。つまり、「役割分離」によって諸原則は保たれているのである。ある役割を演ずるときのオーディエンスは、その役割と矛盾する別の役割を演ずるときのオーディエンスとは違う。そのために、どちらの役割も傷つけることなく、「それぞれの役割を演ずる異なった人間」でいることが出来る。それぞれの役割の母体となるルールは衝突することを免れる。しかし、オーディエンスの分離はしばしば破られる。そうしたとき、どちらの役割（またはルール）に基づいて振る舞ったらいいか分からなくなって当惑することになる。

さらに、たとえ分離がなされていても、一貫した自己を示せないことに自己は気づいたとき、当惑を覚える（この場合、「自己嫌悪」の感情も同時に覚えることもしばしばである）。ここでは、ある集団（または場）のルールから外れて、今そこにいる集団（場）のルールに従わざるを得ないときにためらってしまうような「当惑」の例を見ていこう。

……よく想定され、また証拠もあることは、パスしている者が、違った集団への所属感に引き裂

かれていると感じている、ということである。パスする者は新しく所属する〈集団〉に疎外感を覚えることがある。というのは、彼は自分の本来の姿と自覚しているものに対する彼らの態度に全面的に同調することができないのが通常だからである。しかも、彼が従来所属していたカテゴリーに対して向けられた、新たに所属しようとしているカテゴリーの成員による〈攻撃的〉な言及に反対できないとき——ことに、この攻撃的言及に同調しないと危険だと感じたとき——恐らく彼は不実と自己嫌悪の感情に悩むであろう。[ST: 87, 訳 142-3]

さらに次の例も、集団ごとの原則の矛盾によって生じた当惑である。ゴフマンは「信頼を失う事情のある者たち」に関して次のような引用を行っている。

〈倒錯者〉(queers)に関する冗談が交わされるとき、私は他の連中に調子を合わせて笑わなくてはならなかったし、話が女におよぶとき、私は自分の女性征服物語をでっちあげなくてはならなかったのである。こんなとき、私は自己嫌悪を感じた。しかし、他にどうすることもできそうになかった。私の全生活は嘘のかたまりであった。[ST: 87-8, 訳 143]

上の例は、従来所属していたカテゴリーの成員による原則と、新たに所属しようとしているカテゴリーの成員による原則の矛盾によって当惑が生じている例である。つまり、倒錯者の原則と、「通常の」性愛者の原則との矛盾によって当惑が生じているのである。さらにゴフマンは次のような引用も行っている。

(友人たちが) オールド・ミスのごとくにふれるとき、ときどき出す声の調子を聞くと、私は冷やっとした。というのは、私は表向き既婚女性ということになってはいたが、実は既婚者達が軽べつするような眼つきで見える状態(=未婚)にあったので、人を欺いているように感じたのであった。同時に私は未婚の同性の友人たちに対して自分が不実だとも感じた。彼らはそういうことを話題にはしなかったが、多少は好奇の目で私を見、私が実際にはしていない結婚生活をうらやんだのである。[ST: 88, 訳 143]

このようにして、人々はしばしば矛盾する諸原則に直面する。そして当惑する。諸原則の矛盾によって起こる当惑とは、ゴフマンが論じた数少ない社会組織の問題であるともいえる。この社会組織の構造は、しばしば自己のなかの当惑という形であらわれてくる。ゴフマンは次のように言う。

アイデンティティーの葛藤の背後には、より根本的な葛藤、すなわち組織の原則の葛藤が存在す

る。なぜなら、自己というものは、多くの場合、単に、正統的な組織の原則を人の自己に応用したにすぎないからである。[IR: 111, 訳 109]

われわれは、果たして社会組織の諸原則の矛盾によって生じる当惑を容易に処理することはできるのであろうか。

2-2 当惑の処理——その困難と適応

人々は、どのようにして諸原則ないしルールの矛盾による緊張関係から来る当惑を処理しているのだろうか。

一つには、たしかに「役割分離」を徹底させれば、このような当惑の生じるのを避けることが出来るようにも見える。ゴフマンが例を挙げるように、労働時間をずらせたり、地位ごとに隔離したカフェテリアを用いたり、管理職用のエレベーターを導入するという形で、役割分離を図ろうとすることも出来る[IR: 110, 訳 107-8]。しかし、諸原則の矛盾は「出会う」。諸原則の矛盾によって生じた当惑に対しては、どのように処理がなされるのか。原則が明示的であるような場合には相互作用レベルでの「交渉」などによって、諸原則間の矛盾を調整していくことが考えられる。しかしほとんどの場合、原則を一つの状況内のみで変容させるのは不可能である。

諸原則の矛盾の緊張関係から来る当惑に対する調整は、「適応 (adjustment)」としてとらえられる。ゴフマンは、個人にとってのよい適応とは、社会にとってはさらに望ましいものであるという[ST: 122-3, 訳 200]。個人が適応すれば、矛盾をともなった社会も柔軟性を獲得することになる。ゴフマンは例えば次のように言っている。

よい適応とは、スティグマのある者が（一方では）晴れやかに、しかも自意識を伴わずに、自己自身を基本的には常人と同じ人間として受け容れ、他方常人が口先だけにしろそこで彼を常人同様に受け容れているとはいいいにくい状況から自発的に身を引くことを必要条件とするのである。

[ST: 121, 訳 197]

では、このような適応は実際どのようにしてなされるのだろうか。人はしばしばコンフリクトのリアリティを否定することで矛盾が露呈しないようにする。ゴフマンは諸原則のコンフリクトを避けるための方法として「ふざけ (joshing)」について言及している。

それ（ふざけ）は、当惑によってか、あるいは当惑の原因となったものによって、惹き起こされた緊張を解消する手段である、といわれている。しかし、多くの場合において、この種の冗談は、

いま起こっていることは深刻なことや真面目なことではないということを表示する方法である。誇張、ふざけたかたちの侮辱、ふざけたかたちの要求——これらすべては、事態の現実性を否定することによって、コンフリクトの深刻さを減少させる。[IR: 112, 訳 295]

もちろん、スティグマ者が、冗談を言うことを許されなかった先ほどの例のように、上の「ふざけ」による調整がうまく行かなかったり、失敗したり、さらにはまわりの人びとの当惑を助長することもある。

2-3 当惑の表出と諸原則の存続

当惑の処理を行うため、例えば（役割距離などに見られるように）冗談とかふざけなどが一定の機能を果たしていることは見て来た。その機能とは、諸原則がコンフリクトを起こしているというリアリティを否定して別のリアリティを形作るものである。だが、コンフリクトのリアリティの否定は、当惑もその機能を果たすことも多い。当惑もまた、問題となるリアリティを否定して、コンフリクトの深刻さを減少させるものなのである。

つまり、当惑そのものを表出するという処理の方法も意味があるのである。当惑とは何らかの差異によって生じる。そして差異によって生じる感情のなかでも、否定的なものとして考えられている。心地よい当惑というものもあるが、普通はできれば人々は当惑したくないと願う。そして普通は当惑しているのを見せたくないとする。だが、矛盾する諸原則によって起こる当惑に関しては、ある積極的な機能が担わされているように見える。それは、矛盾する諸原則の存続を可能にさせるという側面である。当惑そのものを表出することがいつも秩序の阻害要因になるわけではないことは前に見て来たが、このことは諸原則をめぐっても言えることである。当惑の処理とは、ある矛盾を中和するような作業であった。だとすると、当惑そのものを表明することは、矛盾をそのまま表明することであり、矛盾を強化する傾向にすらある。しかし、矛盾によるコンフリクトの露呈は避けられる。原則と原則の矛盾を表わす当惑をそのまま表明すれば、原則と原則は衝突することなく矛盾を再生産する。つまり、どちらかの原則のみが採用されるというよりも、原則と原則とは矛盾を保ちながら、存続が可能になる¹³。

実際、諸原則の矛盾はあらゆる場面で起こりうる。これを、一人の個人がいくつもの集団に属しており、さらには様々な背景、立場が存在しながら何とか成り立っている近代社会の特質の一つであるといってもよい。いずれにせよ、「いかなる社会システムにおいても組織の諸原則は、ある時点で衝突

¹³ 「諸原則の矛盾をよしとしない」とする正義論的な考察はまた別の問題であって、ここでの関心はあくまでも「当惑」が担っている機能についてである。

をきたすようになる傾向を持つ」のであるが、「人は、二人の人間のどちらにもなり得ないとき、当惑を示すことによって、将来適切にそのどちらにもなり得る可能性を残しておくことができる」のである。それはあたかもコンフリクトによる終結を持ち越すかのようなものである。ゴフマンにとって、この限りで当惑は儀礼ルールを破る非合理的な衝動ではなくて、それ自体秩序へと志向した儀礼行動の一部なのである。当惑を表明することは、その場で一貫した自己を示すことができないことを意味し、人は「二つに引き裂かれる」ような感覚を覚える。しかし、当惑の表出によって両方の原則が直接衝突するのを免れる。そして相互に関係のない原則が、ともに機能しうることになる。そうして社会構造は柔軟性を獲得しているのである。コンフリクトによって一方の原則が他方の原則を凌駕してしまうのではなく、当惑で複数の可能性を示すことは、異なる諸原則を存続させ、社会構造が柔軟性を獲得するための重要な機能を果たしているのである[IR: 97-112, 訳 94-110]。

むすび

多くの場合、当惑とは忌避対象である。当惑とは秩序が脅かされている徴候だから、当惑しないように行為することが、秩序維持に志向していることになる。もちろん、この当惑回避の側面は重要であるが、生じた当惑を処理する方法という側面も再秩序化を志向した行為としてまた重要である。さらには、当惑とはいつでも回避の対象となるとは限らない。

当惑はあるルールから外れたときに生じる。本稿では、儀礼ルールを外れて逸脱行為をしてしまったり、目の当たりにしてしまったときに生じる当惑、さらに、矛盾する諸原則が出会ったときに生じる当惑について考察した。そしてそれぞれの場合において、その生じた当惑を処理する方法、さらには当惑を「表出する」ことの意味についても見て来た。

儀礼ルールは様々な形の行為によって破られ、当惑は起こる。そして生じた当惑を処理することは、儀礼ルールと逸脱行為の間を調整することを意味する。その処理の手続きも、例えば弁明や陳謝（逸脱行為にサンクションを与える形態の一つ）などという形で儀礼ルールのなかに用意されている。そうして、儀礼ルールは再確認される。さらに、陳謝などの際に見られるように、当惑を「表出する」ことにも一定の意味がある。ある儀礼ルールはいつも完全に守られることが望ましいとされるわけではない。心地よい当惑の状態があるように、儀礼ルールから逸脱することも時には求められる。これは儀礼ルールの柔軟性を意味している。

そして社会の諸原則は矛盾しており、その矛盾が「出会う」ことによって人は当惑する。人は社会の諸原則に対しては相対的に無力であることが多い。諸原則の矛盾から生じた当惑は、コンフリクトのリアリティを否定するような形で処理されることが多い。ある種の「適応」もなされる。さらに、当惑そのものを表出することにも諸原則にとって意味ある行為であった。つまり、当惑を表出するこ

とは、矛盾する諸原則の存続を可能にさせる機能を果たしていた。そうして社会の矛盾する諸原則は存続し、社会構造は柔軟性を獲得することが出来ている。

当惑とは常に回避の対象というわけではない。当惑を表出することが求められる場面もあり得る。さらには、当惑は表明することが適切な場面が存在することは、儀礼ルールや諸原則といったものが柔軟性を持っているだろうことを示している。示すことが適切な当惑とは、社会構造の柔軟性を示していると言えるのである。

われわれは社会に存続する矛盾とどのようにして付き合っているのだろうか。それを「当惑」という感情が教えてくれるとも言えよう。

参考文献

- Abbott, Andrew, 1999, *Department & Discipline: Chicago Sociology at one Hundred*, University of Chicago Press.
- 安達正嗣, 1984, 「E.ゴッフマンの相互作用儀礼論をめぐって」『甲南大学紀要・文学編(社会科学特集)』55: 1-19.
- Chriss, James, J., 1999, "Role Distance and the Negational Self," Greg Smith ed., *Goffman and Social Organization: Studies in a Sociological Legacy*, Routledge, 64-80.
- Collins, Randall, 1985 (1994), *Four sociological traditions*, Oxford University Press. (=1997, 友枝敏雄訳者代表『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣.)
- Colomy, Paul and J. David Brown, 1995, "Elaboration, Revision, Polemic, and Progress in the Second Chicago School," Fine, G. A. eds., *A Second Chicago School?: The Development of a Postwar American Sociology*, University of Chicago Press, 17-81.
- 藤澤三佳, 1988, 「ゴッフマンにおける儀礼侵犯の問題——『アサイラム』と日常世界内の個人の『汚染』『ソシオロジ』33(1): 77-94.
- 船津衛, 1999, 『アメリカ社会学の展開』恒星社厚生閣.
- Goffman, Erving, 1956, "Embarrassment and Social Organization," *American Journal of Sociology* 62 (3) : 264-71.
- , 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday Anchor. (=1974, 石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房.) (PS)
- , 1961a, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (=1985, 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』誠信書房.) (EN)
- , 1961b, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, New York: Doubleday Anchor. (=1984, 石黒毅訳『アサイラム——施設被収容者の日常世界』誠信書房.) (AS)
- , 1963a, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (=1970, 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.) (ST)
- , 1963b, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press. (=1980, 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房.) (BP)
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, New York: Double-day Anchor. (=1986, 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版社.) (IR)

- , 1971, *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*, New York: Basic Books. (RP)
- Heath, Christian, 1988, "Embarrassment and Interactional Organization", Paul Drew and Anthony Wootton eds., *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Polity Press, 136-60.
- 石黒毅, 1985, 「儀礼と秩序——初期のゴッフマン社会学における表出の機能論的微視分析」『現代社会学』11 (1) : 30-63.
- 石川准, 1992, 『アイデンティティ・ゲーム——存在証明の社会学』新評論.
- 桐田克利, 1982, 「相互作用儀礼と共謀関係ゲーム——E.ゴッフマンのパーズベクティブから」『ソシオロジ』27 (2) : 41-58.
- , 1989, 「儀礼の社会学——ゴッフマン」片桐雅隆編『意味と日常世界——シンボリック・インタラクシヨニズムの社会学』世界思想社, 217-40.
- 紀葉子, 1988, 「ゴッフマンの『聖なるもの』——デュルケム儀礼論の今日的展開」『立命館産業社会論集』24 (2) : 123-46.
- , 1990, 「現代社会を生きる『聖なる個人』——その社会学的身体をめぐる考察」『立命館産業社会論集』25 (4) : 105-36.
- 小原一馬, 1997, 「ブルデュー資本概念における『秘密』と『隠蔽』——ブルデューモデルによる『公然の秘密』とそのゴッフマンモデルとの相補性」『ソシオロジ』42 (2) : 3-24.
- 近藤泰裕, 2000, 「役割行動と社会的自己——E.ゴッフマンの『役割距離論』再考」『市大社会学』1: 1-11.
- 草柳千早, 1991, 「恋愛と社会組織——親密化の技法と経験」安川一編『ゴッフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』世界思想社, 129-56.
- 宮坂敬造, 1984, 「儀礼におおわれた対人的相互作用——狂気と生の考察にみられるゴッフマンの儀礼論について」『現代社会学』11 (1) : 64-108.
- 宮内正, 1991, 「儀礼秩序の仕掛け——自己崇拜の維持装置」安川一編『ゴッフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』世界思想社, 65-99.
- , 1995, 「ディスプレイという規範——ゴッフマンの描く社会的相互行為の世界」笠原清志・西原和久・宮内正編『社会構造の探求』新泉社, 295-318.
- 森下伸也, 1996, 『ユーモアの社会学』世界思想社.
- 中河伸俊, 1995, 「構成主義の感情論」船津衛・宝月誠編『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣, 198-211.
- 岡原正幸, 1997, 「感情社会学の成立と展開」岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准編『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代』世界思想社, 1-42.
- 大村英昭, 1985, 「ゴッフマンにおける〈ダブルライフ〉のテーマ——演技＝儀礼論の意義」『現代社会学』14 (1) : 5-29.
- , 1990a, 「儀礼と演技——ゴッフマンの社会理論」中久郎編『現代社会学の諸理論』世界思想社, 139-57.
- , 1990b, 「ゴッフマンの秩序イメージ——感情制度と権力」『現代社会学群像』恒星社厚生閣, 69-86.
- 権野信雄, 1991, 「ドラマトゥルギキから相互行為秩序へ」安川一編『ゴッフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』世界思想社, 33-64.
- 高橋由典, 1982, 「日常における儀礼と演技」仲村祥一・井上俊編『うその社会心理』有斐閣, 43-63.
- 谷泰, 1987, 「会話における笑い——その表出機能の追及」谷泰編『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所, 49-146.
- Winkin, Yves., 1988, *Erving Goffman: Les Moments et Leurs Hommes*, Paris, Seuil/Minuit. (=1999, 石黒毅訳『アーヴ
- Kyoto Journal of Sociology IX / December. 2001

ィング・ゴッフマン』せりか書房.)

- , 1999 “Erving Goffman: What is a life? The uneasy making of an intellectual biography” G. Smith ed. *Goffman and Social Organization: Studies in a sociological legacy*. Routledge: 19-41.
- 安川一, 1988. 「相互行為の演技と儀礼——ゴッフマンの初期著作を素材として」『経済学紀要』垂細亜大学経済学会, 13 (1) : 63-99.
- , 1997. 「“感情する” 秩序——当惑と相互行為秩序」岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准編『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代』世界思想社, 139-74.

(にしかわ ともゆき・博士後期課程)

Social Meaning of “Embarrassment”: Development from Goffman’s Theory

Tomoyuki NISHIKAWA

An individual sometimes recognizes embarrassment in everyday life. He tends to hate to be embarrassed. So he tends to avoid embarrassment. This “embarrassment avoidancers” image is one aspect of socialized man. But this aspect cannot fully cover the social meaning of “embarrassment”. “Embarrassment” seems to have some crucial social meaning not only in avoidance but also in expression. This essay is to evaluate the social meaning of embarrassment from Goffman’s point of view.

Embarrassment can be recognized when something (or someone) is deviated from some rules. This essay is dealing with two contexts. First, it deals with the embarrassment when someone’s act seems to be deviated from some ritual rules. Second, it deals with the embarrassment when incompatible principles seem to encounter in one place. In both cases, an individual tries to deal with emerged embarrassment.

In the first case, he or others try to change the meanings of deviant act into the meanings that can be seen as acceptable. The main devices for remedial work are, for example, accounts, apologies, and requests. And in some cases, embarrassment is not an object of avoidance but one of expression. This seems to be one aspect of elasticity of social structure.

In the second case, it is almost impossible to change principles in one situation. He tries to adjust oneself to reduce the seriousness of conflict by denying current reality. And to express embarrassment has some social function. To express embarrassment leaves the possibility that incompatible principles can maintain. So embarrassment has social function for elasticity of social structure.

“Embarrassment” seems to tell us how we lead our lives in many incompatible social principles.